

主要底魚類の資源評価に関する研究

(資源評価調査)

曾田一志・佐々木正

1. 研究目的

本県の主要な漁獲対象種の内、底魚類14魚種の資源状況を漁獲統計調査、市場調査、試験船調査により把握し、科学的評価を行なうとともに、資源の適切な保全と合理的かつ永続的利用を図るための提言を行う。また、本調査から得られた主要底魚類の漁獲動向については、平成18年度の漁況として別章に報告した。

2. 研究方法

主要底魚類14種（ズワイガニ、ベニズワイガニ、ニギス、ヒラメ、マダイ、ハタハタ、タチウオ、カワハギ類、トラフグ、キダイ、ヤリイカ、アナゴ、アカムツ、アンコウ）について漁獲統計資料の収集、市場における漁獲物の体長組成調査、生物精密測定および試験船による分布調査を実施した。さらに、これらの調査結果をもとに独立行政法人水産総合研究センターおよび関係各県の水産研究機関と協力して、魚種別の資源評価を行い生物学的許容漁獲量(ABC)の推定を行った。

3. 研究結果

(1) 漁場別漁獲状況調査

沖合底びき網漁業および小型底びき網漁業について、65ヶ統の漁獲成績報告書の収集、整理を行い、フレスコシステムによりデータ登録を行った。また、ずわいがにかご漁業、べにずわいがにかご漁業について漁獲成績報告書と産地市場における漁獲統計の整理を行った。

(2) 生物情報収集調査

主要底魚類14種について漁獲統計資料の収集、整理を行うとともに、島根丸でのトロール網試験操業に漁獲された漁獲物の体長測定を行った。また、4魚種（マダイ、ヒラメ、アカムツ、アンコウ）に関しては産地市場において

漁獲物の体長組成調査を、2魚種（アンコウ、アカムツ）は体長、体重、生殖腺重量、胃内容物等の測定を行った。さらに、独立行政法人日本海区水産研究所、西海区水産研究所が中心となって行う資源評価会議に参加し、資源量、漁獲水準、漁獲強度の推定と、管理方策の提言を行った。これらの調査結果をもとに、トビウオ通信平成18年7月号において8魚種（ケンサキイカ、ヤリイカ、アナゴ、アンコウ、アカムツ、ニギス、キダイ）について、資源動向や各魚種を対象とする漁業の動向に関して報告を行った。

また、日本海区水産研究所及び西部日本海沿海各県が参加する日本海中西部広域連携ヒラメ調査において、本県沖合で採取された放流ヒラメについての遺伝子情報（mtDNA）の採取を行った。

4. 研究成果

研究結果から推定されたABCをもとに、ズワイガニのTAC（漁獲可能量）が設定された。

マダイ、ヒラメについては市場調査で得られた体調組成及び放流魚の採捕率について、放流効果調査データとして利用された。